

## 「いま伸びる力とあと伸びる力を育てる」について

鳥取大学附属学校部長 住川英明

近年、子どもの学力についての議論が進み、ことに OECD の調査結果など国際的な比較の視点から我が国の子どもの学力が注視されるようになって、これまでの我が国の学校教育における学びが、結果としての知識の量を問うことばかりに偏っていたのではないかと指摘されています。このことに対する反省から、子どもたちが「何を知っているか」ではなく「何ができるのか」が問われるようになり、他者と協同しながら新しい考えや知識を生み出すことのできる力を育成することが求められるようになりました。

また、そのような学力に対する考え方の変化とあわせて、発達的な視点から子どもを見取り、見守る必要性が強調されるようになりました。それを受けて、学制が見直されて、従前は盛んではなかった中等学校や義務教育学校が新たに開校されたり、幼・小・中の校種間で連携したカリキュラムづくりが試みられたりしています。

鳥取大学附属学校部では、これまでも「育てたい子ども像」について、各校園を中心に議論が重ねられてきました。いうまでもなく私たちの研究は「教育実践研究」ですから、各校園の教育実践における諸課題を解決するために、それらを整理し、構造化して、教育研究のテーマとして設定してきたわけです。ただ、これからの学校教育を考えるとき、新しい学力観や一貫した発達の視点からの再検討が求められているのも事実でしょう。

そこで私たちは、子どもたちが各々の発達段階の中で身につけるべき知識や技能を着実に育てるとともに、学びのプロセスの中で他者とよくかかわり、思考し、判断し、表現する能力を育て、あわせて容易に答えの出ない自己や社会の課題に対して、ねばり強く取り組もうとする意欲を養いたいと考えました。

学力については、現在さまざまな捉え方がなされています。私たちは、学力を、定量的に捉えやすい力と捉えにくい力の総体と考え、いずれかに偏ることなく、しかも本来的な統合化されたかたちで、子どもたちを育成していきたいと考えています。そうすることで、子どもたちに、今まさに成長しているという確かな手応えを持たせるとともに、未来においても成長できる礎を築くことができると確信しているからです。「いま伸びる力」と「あと伸びる力」は、それらを象徴する言葉として選び出したものです。

私たちはこれまで、自信と自省の態度をもった個性豊かな子ども、また高い志をもち集団の中で自他を認め合う子どもを育成することを目標として、永年にわたり教育実践を続けてきました。そのことによって、地域社会の教育・文化に対しても、いささかの寄与ができたのではないかと自負しています。

これからは、新たに「いま伸びる力とあと伸びる力を育てる」を附属学校部全体の教育研究の主題として定め、この主題の下で各校園における校種の特徴や実情にあわせた教育研究のテーマを設定して、教育実践や研究活動に従事していきたいと考えています。

(2017年10月記)

# 研究の概要

## 研究主題：未来へつなぐ教科・領域の授業づくり（4年次）

### 1 研究の背景

#### (1) これまでの取組と成果と課題（1年次～3年次）

鳥取大学附属学校4校園では、2017年度から共通テーマとして「いま伸びる力とあと伸びする力を育てる」を掲げている。「いま伸びる力」を育てるとは、目の前の子供たち自身が今まさに成長しているという確かな手ごたえをもって学んでいくことである。「あと伸びする力」を育てるとは、子供たちが将来において急速に変化する社会の中でも自己成長できる礎を築くことである。

この4校園の共通テーマを受けて、鳥取大学附属小学校では、目の前にいる子供たちをこれからの時代へ「つなぐ」という意味から、研究主題を「未来へつなぐ教科・領域の授業づくり」とした。

1年次の研究では、これまで取り組まれてきた先行研究や実践をもとにしながら、2017年に告示された小学校学習指導要領が示している

記述や事例を批判的な視点で討議し、各教科・領域の本質や特質を踏まえた学びとはどのようなものか、授業づくりと実践を重ね、帰納的に研究を進め、研究主題の位置付けに迫った。その結果、子供たちが学びを実現するためのポイントを各教科・領域において絞り、提案することができた。また、各教科・領域の本質に迫る学びのプロセスについて仮説を立てた。

2年次の研究では、各教科・領域の本質に迫る学びのプロセスの構築を図った。なぜなら矢部(2020)が述べているように、もし学びのプロセスが分かってくれば、そこから学習を支援するための示唆やヒントが得られる可能性が生まれるからである。つまり、「未来へつなぐ教科・領域の授業づくり」をより明確にイメージするために、学びのプロセスの構築は不可欠であると考えた。教科・領域特有の見方・考え方を働かせる学びのプロセスはどのような構造・形態が適しているのか、子供の変化を授業中の発言や子供の学習記録などをもとにその効果を検討した。また、研究実践後の質問紙も検証材料とし、仮説的な学びのプロセスを分析し、考察した。一方で、評価の結果が子供たちの具体的な学習改善につながっていなかったことや、研究を通して目指す子供像が明確でなく、日々の子供の変化の見取りも不十分であり、子供の姿を通した評価の応用的利活用というところに課題が残った。

3年次の研究では、子供の具体的な変化に着目して、学びのプロセスの検証に取り組んだ。各教科・領域の実践において、協働の学びを通して得られた子供の姿から、構築した学びのプロセスにおいて一定の効果が得られたと考えられる。一方で、単に学びのプロセスをたどらせるだけでは、多種多様な環境や課題に対して、状況に応じて自らの思考力を働かせたり主体的に粘り強く取り組んだりする学びに向かう力を育成することにつながるものではないことも明らかになった。

#### (2) 本年度の取組について（4年次）

昨年度の課題を受けて、4年次である本年度は、教科特有の見方・考え方を働かせつつ、総合的な活用力につながる現実世界に対応した「使える」レベルの学力・学習の質的向上を実現させるために必要なことは何かを明らかにする。また単に学びのプロセスをたどるだけでなく、学びのプロセスの中で子供たちが学習に主体的に粘り強く取り組むことができるよう、教科・領域の世界に没入していく学びの実現のために必要なものは何であるのかを見出す研究を進めていく。

1年次の研究を始めるに当たって掲げていた学習指導要領が改訂されたことによって、各教科・領域で何が変わり、何が変わらないのかということと、子供たちが教科・領域の本質や特質（特有

の見方・考え方)が見出せる実感を伴う学びとはどのようなものかについては、3年間の「学びのプロセス」を突き詰める研究の積み重ねにより明らかになってきた。

次の段階として、学びのプロセスをさらに発展的に深めていくために、石井(2020)が著書で述べている2つの事柄を見出していく必要があると考える。1つ目は、「使える」レベルの総合的な活用力である。新しい学習指導要領において、カリキュラムは内容ベースから「資質・能力」(コンピテンシー・)ベースへと変化している。コンピテンシー・ベースのカリキュラムを目指すことに伴って、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視されるようになった。このような教科内容に関する学びの深さは3つのレベルで捉えることができる。①「知っている・できる」レベル、②「わかる」レベル、③「使える」レベルである。これから未来に向けて、現実世界の文脈に対応して個別の知識・技能を総合する「使える」レベルの思考力が重要になる。つまり知識の有意味な使用と創造に関わる「使える」学力・学習の質的レベルを探ることが今後未来へ向かう子供たちの育成のために必要になる。

2つ目は、教科の世界に没入していく学びの実現である。学習指導要領がめざす主体的・対話的で深い学びにおいては、自己や他者だけでなく、対象世界と向き合う学びの実現を目指していくことが必要である。教科・領域の本質や特質(特有の見方・考え方)が見出せる実感を伴う学びやそれを効果的に身に付ける学びのプロセスを明らかにした次の段階として、子供たちが主体性をもって教科の世界に没入して学んでいく姿を実現するために、どのような授業が必要であるかについても探っていく必要がある。

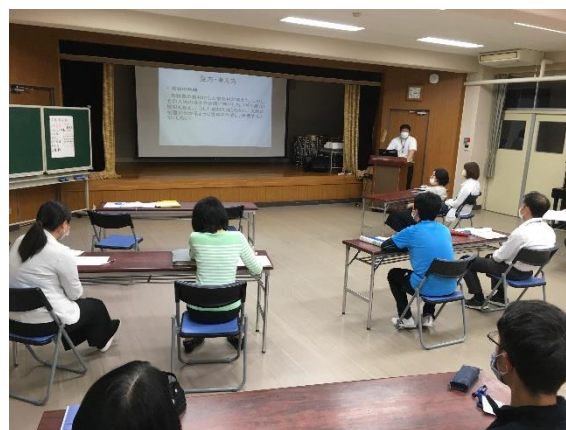
#### 【4年次の研究として全体で追及したもの】

☆学びの中で教科特有の見方・考え方を働かせながら、現実世界に対応した総合的な活用力の育成のために必要なことは何であるか。

☆学びのプロセスを子供たちが主体的に粘り強く取り組むために、教科・領域の世界に没入していく学びにおいて必要なものは何であるのか。

#### (i) 研究の目的・方法・検証の明確化

本年度は、年度初めの研究のスタート段階で明確な研究全体のイメージをもつことを大切にしたい。研究の目的・実践方法・検証方法を具体的に決めることで、1年間の各自の研究全体の見通しをもって一貫した考え方で進めていくことをねらった。そのため、まず4月～5月にかけて、どのような研究でどのように検証を進めていくのか各教科・領域部がプレゼンテーションを行った。質疑応答の場を設け、全職員で研究内容の共有を行った。さらに1回目の公開研究授業(全7回:14授業)を夏休み前までに行った。これにより個人の研究方針がより明確になり、職員全体の共有が早まった。



年度始めの研究プレゼンテーション

#### (ii) 研究グループの編成

本校の各教科・領域部の職員編成は算数科・社会科・生活科の2名を除くと基本的には各1名である。つまり校外の共同研究者と一緒に研究を進めていくのであるが、校内での研究は1人で行っている。そこで、校内でのサポート体制を整えるために、日常的に研究について相談できるグループを昨年度より立ち上げた。

その研究グループの中で研究の方向性や実践方法を話し合ったり、研究授業の前には事前研究などを行ったりした。教科を横断するグループ編成のためそれぞれの専門性を生かしたアドバイスができ、自分とは別の発想や視点を取り入れて研究を深めることができた。

- 国語・国語（書写）・社会・図工：三谷，竹内，尾崎，田中，堀
- 算数・理科・プログラミング：大杉，前田，磯江，完田，福田
- 外国語・生活・音楽・道徳：横山，西尾，山本，谷口，乾

### (iii) 11 の教科・領域の公開研究授業・共同研究者参加型研修とオンライン研究発表大会

昨年度に引き続き本年度も、11の教科・領域すべてにおいて全職員参加、共同研究者参加の授業研究会・研修会の実施を試みた。全体での研究の共有は、各自の実践を研究によって明確な理論につなげ、それを再び全員の実践に生かしていくことを目指している。研究授業では、共同研究者と連携して授業づくりをし、事後研究会の場で研究の視点に沿った協議を行うことで研究内容をさらにブラッシュアップしていった。研究を公立小学校や関係諸機関に広く還元することをねらって、すべての授業を公開とした。授業の参観者には事後研究会にも参加していただくよう努めた。さらに公開授業と同時開催した共同研究者の先生方のご講演を年度の早い時期に聴くことができ、各教科・領域の最新情報を実践に生かしていく期間を長くとることができた。また、今年度はオンラインによる研究発表大会を実施した。例年よりも県外からの参加者が多く、メールによる意見交換では、時間をかけてより深い部分での情報交換ができた。オンラインでの授業公開をきっかけに本校職員も積極的に県外のオンライン研究会への参加を始めた。これによりさらに大きな視野で自己の研究を見つめ直す機会になり、各自の研究の深まりにつながった。



共同研究者参加型研修

### 【文献】

- 石井 英真（2020）授業づくりの深め方 「よい授業」をデザインするための5つのツボ ミネルヴァ書房
- 矢部 敏昭（2020）協同的問題解決におけるプロセス評価の理論的枠組み ー数学教育学から教科教育学へー地域学論集 第17巻 第1号 P89-P97
- 鳥取大学附属小学校（2017）実践記録集
- 鳥取大学附属小学校（2018）研究紀要
- 鳥取大学附属小学校（2019）研究紀要
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 総則編